

聖霊降臨後第24主日（10月30日の聖書箇所）

I 第一朗読（イザヤ1章10―20節）

- 10 ソドムの支配者らよ、主の言葉を聞け。
ゴモラの民よ
わたしたちの神の教えに耳を傾けよ。
- 11 お前たちのささげる多くのいけにえが
わたしにとって何になるろうか、と主は言われる。
雄羊や肥えた獣の脂肪の献げ物にわたしは飽いた。
雄牛、小羊、雄山羊の血をわたしは喜ばない。
- 12 こうしてわたしの顔を仰ぎ見に来るが
誰がお前たちにこれらのものを求めたか
わたしの庭を踏み荒らす者よ。
13 むなしい献げ物を再び持つて来るな。
香の煙はわたしの忌み嫌うもの。
新月祭、安息日、祝祭など
災いを伴う集いにわたしは耐ええない。
- 14 お前たちの新月祭や、定められた日の祭りをわたしは憎んでやまない。
それはわたしにとって、重荷でしかない。
それを担うのに疲れ果てた。
- 15 お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。
どれほど祈りを繰り返しても、決して聞かない。
お前たちの血にまみれた手を
16 洗って、清くせよ。
悪い行いをわたしの目の前から取り除け。
悪を行うことをやめ
17 善を行うことを学び
裁きをどこまでも実行して
搾取る者を懲らし、孤児の権利を守り
やもめの訴えを弁護せよ。
- 18 論じ合おうではないか、と主は言われる。
たとえ、お前たちの罪が緋のようでも
雪のように白くなることができる。
たとえ、紅のようであっても
羊の毛のようになることができる。
- 19 お前たちが進んで従うなら
大地の実りを食べることが出来る。
- 20 かたくなに背くなら、剣の餌食になる。
主の口がこう宣言される。

II 第二朗読（テサロニケの信徒への手紙IIの1章1―12節）

1 パウロ、シルワノ、テモテから、わたしたちの父である神と主イエス・キリストに結ばれているテサロニケの教会へ。2 わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

3 兄弟たち、あなたがたのことをいつも神に感謝せずにはいられません。また、そうするのが当然です。あなたがたの信仰が大いに成長し、お互いに対する一人一人の愛が、あなたがたすべての間で豊か

になっているからです。4それで、わたしたち自身、あなたがたが今、受けているありとあらゆる迫害と苦難の中で、忍耐と信仰を示していることを、神の諸教会の間で誇りに思っています。5これは、あなたがたを神の国にふさわしい者とする、神の判定が正しいという証拠です。あなたがたも、神の国のために苦しみを受けているのです。6神は正しいことを行われます。あなたがたを苦しめている者には、苦しみをもって報い、7また、苦しみを受けているあなたがたには、わたしたちと共に休息をもって報いてくださるのです。主イエスが力強い天使たちを率いて天から来られるとき、神はこの報いを実現なさいます。8主イエスは、燃え盛る火の中を来られます。そして神を認めない者や、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者に、罰をお与えになります。9彼らは、主の面前から退けられ、その栄光に輝く力から切り離されて、永遠の破滅という刑罰を受けるでしょう。10かの日、主が来られるとき、主は御自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、すべて信じる者たちの間でほめたたえられるのです。それは、あなたがたがわたしたちのもたらした証しを信じたからです。11このことのためにも、いつもあなたがたのために祈っています。どうか、わたしたちの神が、あなたがたを招きにふさわしいものとしてくださり、また、その御力で、善を求めるあらゆる願いと信仰の働きを成就させてくださるよう。12それは、わたしたちの神と主イエス・キリストの恵みによって、わたしたちの主イエスの名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主によって誉れを受けるようになるためです。

言葉の解説

11節■「このことのために」。直訳は「このことの中へ」。主イエスは再臨の時に聖なる者たちの間であがめられ、信じる者たちの間でたたえられる(16-10)。この終わりの時を指して「そのことを心がけて」「そのことを目的として」と訳される。■「招き」。信仰への招き、あるいは、主の再臨のときに神の国に入ることを指す(1-5)。■「善を求めるあらゆる願い」。直訳は「善のあらゆる願い」、あるいは「正しさのあらゆる善意」。後者であれば、「正しさがもたらすあらゆる善意」と訳される。

12節■「恵みによって」。直訳は「恵みにそって(に一致して)」。神と主イエスがもたらす恵みは、キリスト者が主イエスの名をあがめ、主によって誉れを受けることである。■「主イエスの名が…あがめられ、あなたがたも…誉れを受ける…」。用いられている動詞はエンドクサンマイ(栄光を受ける)が一回だけである。人が栄光を受けるのは、主イエスに栄光があることを認るときである。

①この手紙は「テサロニケの信徒への手紙1」と共に、パウロ自身によるものだという見方もあるが、大方は、パウロの思想を受け継ぐ者によって書かれたと見ている。おそらく、「主の日」について、第一の手紙の教えを誤解した人々があり、その誤りを正すために書かれたと考えられる。この手紙は、そのような誤った教えに惑わされないようにと警告しているが(2-1-2)、そのためにテサロニケ教会の人々のために祈ることから始める(11-12)。

テサロニケ教会の人々は「迫害と苦難の中」にあるが、彼らが愛を豊かにし、忍耐と信仰を示すことができるのは、現在の苦しみは神の国に入ることのしるしであるという確信に支えられているからだ。彼らが迫害と苦難の中で忍耐と信仰を示し続けるなら、それは彼らが終わりの日に神の国に入れられるということの証明となる(1-3-5)。その確信をさらに強めることができるように、パウロは彼らのために祈る。

11節の「このこと」とは、キリスト者が終わりの日に受ける報いを指している。キリスト再臨の時には、今、教会を苦しめている者たちは苦しみという報いを受け、苦しんでいる教会は安息という報いを受ける。この報いを受けた教会によって、主イエスはあがめられ、たたえられる(1-6-7)。テサロニケ教会の人々がこのような賛美をささげることができるようにと、祈りがささげられる。11-12節は原文ではひとつながりの文章であり、祈りを中央にして、祈りの目的がその前後に述べられている。

このこと(賛美)のために祈っています

神があなたがたを招きにふさわしいものとし、その御力で善を求める願いと信仰の働きを成就するように

それは、恵みによって、主イエスの名があがめられ、あなたがたも主によって替れを受けようになるためです

パウロは、今苦しむ「あなたがた」に神の力が現されることを祈りますが、それは、神の力に満たされた「あなたがた」が主イエスの名をあがめるためです。なぜなら、主イエスへの賛美は「恵みによって(そって)」与えられる賜物であり、神の恵みを受けた者のあるべき姿だからです。従って、キリスト者が受ける榮譽とは、主イエスに賛美をささげるときに与えられるものです。

Ⅲ福音(ルカ19章1-10節)

1 イエスはエリコに入り、町を通っておられた。2 そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。3 イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見ることができなかった。4 それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとおられたからである。5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7 これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行つて宿をとった。」8 しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します。」9 イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。10 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

言葉の解説

1節 ■「エリコ」。ヨルダン川の西岸、死海の北およそ9.5 kmに位置し、世界でももつとも古くから町が開かれていた場所。

2節 ■「ザアカイ」。この物語に登場するザアカイは、ルカが描く象徴的な二つの世界にまたがる人物として描かれる。ザアカイは徴税人であるが、ルカが述べる徴税人は神の呼びかけに心を開いて応じる「罪人」である(三12-13、五27-32、七27-30、一五1-2、一八9-14)。また、彼は金持ちであり、ルカに登場する他の金持ち(二八24-27)と同様、財産への執着から離れたい自分を認識している人物でもある。

3節 ■「見ようとした」。直訳すると「見ることを捜した」。この「捜す」は今日の福音の結び10節にも現れる。イエスがどんな人かを見ることを「捜す」ザアカイは、失われたものを「捜す」イエスと出会う(15章のたとえ、エゼ34章参照)。

5節 ■「今日」。9節にも現れる「今日」は、ルカの救済史観にとって重要な語である。ルカは「差し迫った終末の日」から、教会の「今日」に強調点を移している。終末の教えの重大さを保ちながら、教会の時代における「今日、毎日、日々」を救いが実現される場として提えている。■「泊まりたい」。直訳では「留まることになっている」。ザアカイの家にイエスが留まることは神の計画によるものであることを示す。

8節 ■「立ち上がって」。重大な決意表明や祈るとききの動作。

9節 ■「今日、救いがこの家を訪れた」。救いがこの家を訪れたことは、ザアカイが施すと宣言したことから明らかだ、の意味だろう。

① ルカ福音書は951から、十字架が待つエルサレムに向かって旅するイエスを描いている。今日の福音の舞台となるのはヨルダン川近くの町エリコである。イエスの旅の終わりは近づいている。イエスはこれまで数々の奇跡を行い、エリコの近くでも「ダビデの子よ、憐れんでください」と願った人の目をいやした(一八35―43)。

この町の「徴税人の頭で、金持ちであった」ザアカイもその評判を耳にしていたにちがいない。イエスが町に入ったことを知ったザアカイは「イエスがどんな人か」を見ようとしてやってくる。ルカは、「金持ちとラザロ」の物語に述べるように、金持ちを救いから遠い者として描いている。「徴税人」はローマの手先として税金を取立て、私腹を肥やすこともあったので、ユダヤ人から憎まれ「罪人」と同様に見られていた。ザアカイも人々から「罪人」と呼ばれ軽蔑されている(7節)。

しかし、一方でルカ一八9―14の「ファリサイ派と徴税人」のたとえでは、神に義とされたのは、自分の正しさに自信を持つファリサイ派ではなく、神の憐れみを求めた徴税人であったとされている。徴税人の頭であっても、救いから除外されているわけではない。ザアカイがイエスを一目見ようと思ったのは、単なる好奇心ばかりではなく、金には不自由なくとも、単調な日常生活に漠然とした空虚さを感じていたからであろう。イエスを見たいと思ったザアカイは、人込みに遮られて見えないことを知ると、「走って先回りし」、ついには道端のいちじく桑の木に登ってしまう。イエスの姿を見られなかったことがかえって思いを募らせ、木に登ってしまったのであろう。3節の「見ようとした」という表現は、原文では「見ることを捜していた」となる。これはそのときの彼の心の様子を如実に描き出している。漠然とはあれ、ザアカイは救い主を求めていたのだ。

イエスはそのいちじく桑の木の下、「その場所」に来てザアカイに呼びかける。「その場所」という語には冠詞がつけられている。この場所はイエスとザアカイの出会いの場所として、神によってあらかじめ決められていた場所だからである。「急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」というイエスの呼びかけに、ザアカイはすぐに従う。この「今日は、昨日と明日には生まれた平凡な一日を指すのではない。「今日という今日」、すなわち待ちに待った特別な日を指している。「泊まりたい」というイエスの言葉は、直訳すると「留まることになっている」となる。この出会いは神の意思にもとづく必然性をもった出来事なのである。イエスとの出会いの「今日」を特別な「今日」に変えたのは、神ご自身である。

人々は徴税人のような「罪人」が最初に救われるはずがない、と考えている。彼らはイエスがザアカイの家に泊まるのを見てつぶやく。一方、ザアカイは立ち上がって、貧しい人に施すことをイエスに約束する。このたとえは、原文では7節まで「そして」という接続詞で連続的に出来事が述べられているが、8節で初めて「しかし」という接続詞に変えられる。これは人々とザアカイの対比、さらにはザアカイが「施し」を約束したことに、彼にもたらされた救いが現れていることに注意を向けさせるためであろう。

救いを「捜す」ザアカイは、失われたものを「捜す」神と出会った。救いを「捜す」人は、その人を「捜す」神と出会うことができる。それぞれに「その場所」と「今日」があり、生き方の転換がもたらす喜びが待っている。

② 言葉の広がり(救う・ソーン)

この語は、まず①「さまざまな危険や困難から人を救う・守る」を意味する。水に沈みかけたペトロは「助けてください」とイエスに叫び(マタ一四30)、人々は十字架のイエスに向かって、そこから降りて自分を「救ってみろ」と嘲る(マコ一五30)。イエスはヤイロの娘(マコ五23)、十二年間長血をわずらった女性(マコ五34)、重い皮膚病の人々を「救った」のに(ルカ一七19)、十字架の自分を救おうとはしなかったからである(マコ一五31)。

次に②「宗教的な意味合いを込めて」永遠の死や罪から救う」ことを表す。神は宣教という思かな手段によって人々を「救おう」としたので(1コリ一21)、福音宣教に従事するパウロは宣教によって人々を「救う」ことになる。(ロマ一14)。

ザアカイは特別な危険や困難を抱えてはいない。だから、②の意味での救いにあずかったことになる。このような救いに招かれたので、貧しい者に施す人になる。